

Title	本堂彙報／本會記事／編輯室より
Author(s)	
Citation	懷徳. 1926, 4, p. 4-4
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88725
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

林田 炭翁

雪のこる遠ちの深山のふとこころに
煙たつ見ゆ炭やくらむ
さつき山朝日をうけてあかるきは
みどりにはゆるさくらなりけり
竹透きて 仲田 博一

池田 寺部君子

春雨はいつやみにけむ見渡の野へ
は霞の立ちこめてあり
日あたりをゑらひて竿をかけにけ
りかたえは庭の梅が枝にして
あけひはり雲のかなたに消え去り
て廣野ゆたかに春の風ふく
焼かれたる芝生の中に青々とも
き生てぬ土筆生ひてぬ
畑うちにあちる女の八つ口の黄な
る蝶々にもつれて紅き
土筆入れておもたき袂かへけり
此頃の専なき庭や落椿
白酒や何となき名のなつかしき
暮れし野に白きは畑の辛夷かな
土蜘蛛の這ひ出てにけり花の庭
鳥府に切口の上き池田炭
なれそめし難の名残や今日一日

藤塚まこと

鉄の手を止めて煙草やうららかに
渡し舟を二三人待つうららかに
女客大勢のせて水溜む
都踊りの提灯ともる一齊に
ラオオ聴いて山居の春の夜の團樂

本堂彙報

◎理事會 四月七日大正十四年
度決算及び同十五年度豫算案の
件並に來十月記念祭典の件、書
庫建造の件等につき理事會開會
決算豫算兩案は畧原案通り可決
他の案件は尙更に會合を要する
ことなし、只記念品作製の事項
のみ可決された、

貴族院議員 茶話會員服部一

三、倉知鐵吉、石塚英藏、澤柳
政太郎、荒川義太郎、淺田徳則
藤田四郎、嘉納治五郎の八氏、同
十四日午後四時永田理事長の案
内にて來堂、堂内を一覽して松
山教授の説明を聴取された、
◎若槻首相 同十六日午後二時
永田理事長の案内にて來堂、同
じく堂内を一巡、松山教授の説
明を聴取された、

本會記事

十四年五月一十五年二月
十四年五月二十五日 名譽會員東
北大學教授武内義雄先生來阪せら
れしを機とし、講義終了後午後八
時より歡迎茶話會を小講堂に開催
し三十餘名の參會者があつた、
六月一日 會員並本堂聽講者有志

釀金の北但震災義捐金を精算し、
合計八十七圓也を取纏め、大阪朝
日新聞社に寄託した、
六月十二日 支那留學中の吉田銳
雄先生歸朝せらる、會員數名本會
を代表して神戸埠頭に歡迎した、
六月二十八日 吉田先生歡迎を兼
ね、夏季茶話會を午後一時より大
講堂に開く、吉田先生は留學中の
見聞並に感想を述べらる、
七月二十九日 本堂に於て西村家
が碩園西村先生一年祭を執行せら
る、早朝より會員參集夫々分助
力する、當日北小講堂に故先生の
遺稿遺墨を陳列し展覽に供した、
展覽遺著二十九點、遺墨二十五點
親しく先生の聲咳に接するの思が
あつた、此日式終了後、會長松山
先生、太田幹事は、本會を代表し
て、故先生の墓に參拜せられた、
十月四日 懷德堂恒祭を舉行せら
る、朝來會員參集分助助力する、
十一月二十一日 野口幹事の盡力
奔走にかかる「懷德堂考」和裝本五
十五部成る、希望申込數數倍に上
りたれば按分配布した、
十一月二十三日 秋季探勝會を舉
行、紀州根來寺に向ふ、會長松山
先生同令夫人、吉田先生以下會員
十數名參會、天氣清朗風穩かであ
つた、
十二月三日 名譽會員永田仁助氏
貴族院議員に勅選せられしに就て
賀詞を呈することを定例幹事會に
於て可決し、小沼幹事會員を代表

大正十五年二月十四日 午後一時
濟復興に努力してゐるのが存る、
三十分より大講堂にて冬季茶話會
を開く、會長松山先生、名譽會員今
井、稻東兩先生、主幹吉田先生を
初め會員約五十名參會、曩に吉田
先生が手に入られし稀觀の書吳
康齋文集二套十二冊本を主題とし
て、松山先生の講演あり、次に當
日の講師名譽會員狩野先生は「儒
學の二方面」と題し、仁と禮とに
就て御話があつた、それより茶菓
を喫し、互に談笑少内に岡川幹事
會務を報告し、太田幹事會計報告
をなし、小沼幹事會則中改正の要
旨を述べ、松山先生より補説せら
るるところありて後、替否を起立
に問ひ、原案通り會報は毎年一回
發行、會費を毎年一圓二十錢と改
め、本年は會報を休刊し、中井整
菴先生著「はすがたり」を本堂二
百年懷德堂記念會十年記念のため
覆刻して同會に寄附し、尙其一部
分を會員に頒つこと、會報は臨時
號等適宜發行等の件を可決し、つ
いで幹事の改選に就て、隔意なく
協議し、投票互選し、ついで官命
により歐州へ出張し最近歸朝せる
會員三宅春陽氏は、外遊中實見せ
し事柄につきて、ベルリン市にま
りて、第一に感じたことは、
國民自身の努力が各方面にあらは
れてゐることで、婦人にも頭髪の
裝飾を用ひぬ人が多く、近頃前垂
れがけで町を歩き、味噌こしを
持つて物を買ひに行く風で、男
子もぐるぐる坊主が多い、餘程經

編輯室より

世わたりが苦しくなると、遠い
昔がなつかしくなる。なつかしさ
のあまり、血の氣かよはぬ木石に
夢を刻みこみて禮拜さへするやう
になる。それで満足できうる幸福
な人もあらうが、私どもはさやう
なことでは得心できない。遺され
た先哲のことはをたよりに、血の
かよつた聖賢の魂にふれやうとあ
せめるのは、やむにやまれぬ我々の
魂である。古き心の故郷から、くめ
もくめもつきぬあたらしき生
命の泉をくみとつて、今のくるし
みを慰め、永へに若く清く力強く
満足に生きることをのぞむ心が自
然に集つてこの會をなしてゐる。
この會報はかうした會員の會報で
ある。論說に感想に、會員の精神
の活潑さがうかがはれるべきであ
る。第四號はその見本として出さ
れた、次號よりいよいよ、面目をあ
らはして行くことを信じてゐる。
熱心なる會員が赤裸々な魂の記録
を續々投稿せられんことをのぞん
でやまない。寄稿の集り次第ひき
つゞき發刊する。(樽信)